

## 御国の民の歩み (3) 「さばいてはいけません」

【聖書箇所】 マタイの福音書 7章 1～5 節

### ベレーシート

●今回は「御民の歩み」(3)として、マタイの福音書 7章 1～5 節の箇所から学びます。まずはテキストを読みましょう。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 7章 1～5 節

- 1 さばいてはいけません。さばかれないためです。
- 2 あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。
- 3 また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。
- 4 兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください』などどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。
- 5 偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。

●1～5 節における結論となる節は、1 節です。それを説明するために 2～5 節が記されています。そこで、まず 1 節をじっくりと見てみたいと思います。すると、以下のようになります。

新改訳; 「さばいてはいけません。さばかれないためです。」

英語; 【NKJV】 Judge **not**, that you **be not** judged.

✕ー クリネテ ヒナ ✕ー クリセーテ

Greek; **Μὴ** κρίνετε, ἵνα **μὴ** κριθῆτε

否定辞 命令現在形 2 複

あなたがたはさばくな へのために

否定辞 アオリスト受 2 複

あなたがたがさばかれない

●「さばく」は「クリノー」(κρίνω)

Hebrew; ティシャーフェートゥ **רו-** アシエル

レマアン ティシュフオートゥー **אל**

**לֹא** תשפטו

**אַל** תשפטו לְמַעַן

未完了形 2 複受動態 否定辞 関代詞

あなたがたがさばかれない

前置詞 未完了形 2 複 否定辞

へのために あなたがたはさばいてはならない

●ギリシア語の否定辞はいずれも同じく「メー」(μὴ)が使われていますが、ヘブル語の否定辞には「アル」(אַל)と「ロー」(לֹא)が使われています。これらが動詞未完了形と共に起してニュアンスの異なる「否定命令」を作っています。すなわち、「未完了形動詞+אַל」は「**差し迫った特定の相手に対する命令**」を表し、「未完了形動詞+לֹא」は「**長期にわたる不特定の相手に対する命令**」を表します(橋本巧著「聖書の英語とヘブライ語法」、英潮社、180～181 頁を参照)。

●上記の説明で分かることは、「さばいてはいけません」という「アル」(אל)を伴った当面の禁止否定文よりも、その理由である「さばかれないためです」という「ロー」(לא)を伴った永遠の禁止の否定文の方に強調点が置かれているということです。

●イエシュアが語った教えはすべて御国に関することであることを忘れてはなりません。御国は「マルフォート」(מַלְכוּת)つまり「神の支配」を意味します。そこにはメシアなる王がおり、その王の統治の下に御国の民が存在します。その支配(御国)が到来するときには、イエシュアをメシアとして信じた者も信じなかった者も、すべての者がさばかれるのです。それゆえ、あなたがたは先走って「さばいてはいけない」と御国の民となる者に教えているのです。

●昨今、人から「こうするべきだよ」とか、「バカじゃないの?」とか言われたりすると、「おまえに言われたくない」「あなたにだけは言われたくない」という会話を時折聞くことがあります。これを少し丁寧に表現すると「あなたにそのような発言をする資格があるのでしょうか」となります。こうした言葉は正論である場合が多いのですが、ある特定の人から言われると、「イラっ」としてしまうものです。「おまえに言われたくない」「あなただけでは言われたくない」ということばの裏には、「別の人になら言われてもいい」という意味が含まれています。ではこの「別の人」とは誰なのでしょう。それは、自分を基準にして、人柄や人格がしっかりしていて尊敬できる人のことです。

●さて、今回のテーマは「さばき」ということです。「さばく」と訳されたギリシア語は「クリノー」(κρίνω)で、新約では114回も使われています。この動詞には肯定的な面と否定的な面とがあります。前者の面としては「分析する」「考える」「評価する」「見分ける」「判断する」「治める」「決心する」という意味合いで使われ、後者の面としては「見下げる」「批判する」「批評する」「非難する」「中傷する」「人間的な判断でさばく」「罪に定める」「訴える」といった意味合いで使われています。前者の意味での「さばき」は大切にしなければなりません。しかし、後者の意味での「さばき」は問題です。

●ある小学生が「先生、〇〇くんがよそ見をしています。」と言いました。これがさばきです。つまり、よそ見をする者だけが、人のよそ見に気づくのです。まじめに先生の方を見ている子はそのことに気づきません。人の罪に気づくのは、自分も同じ罪があるからです。自分の罪を見つめようとせず、自分を棚に上げて人をさばく、これがさばきの精神です。だれもこのさばきの精神から逃れることができません。さばかないで生きるというのは、息をしなくて生きるといふものだといふ人は言いましたが、まさにそのとおりです。人をさばくときは、往々にして「自分のことを棚に上げて」、正論を言うものです。

## 1. 「さばき」の様相

●「さばき」の様相は多くあったとしても、「さばき」の真相はひとつです。その「真相」とは、私たちのだれもが持っている、自分はさばかれている(批判されている)かもしれないという「恐れ」です。この

「恐れ」はとても根深く、自分がさばかれている(批判されている)という「恐れ」が強ければ強いほど、それだけ強く人をさばく傾向があるようです。さばかれているという「恐れ」に耐えることができずに人をさばく。これがさばき合いの心理です。まさにこの世は、「さばきの霊」が蔓延しています。特に、スキャンダルな記事が好まれるのは、人の深層にあるさばきの精神です。

●この「恐れ」に勝利するためには神の愛を知ることです。なぜなら、「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」(Iヨハネ4:18)とあるからです。すべての人間のうちにある「恐れ」が罪から来ている現実を神の光によって知ること。そして、真のさばき主である神の赦しを経験することです。このことによってはじめて、この「恐れ」から解放されるのです。

●聖書にはいろいろな「さばき」の様相が記されています。私たちは、愛のない態度で、周囲の人の人格や行為を批判し、こうだと決めつけてしまう傾向があります。信仰の根本的な事柄ではないことで、互いに異なった見方や考え方の相違から、さばき合いが起こり、教会の不一致をもたらしているような場合です。例えば、ローマの教会がそうです。この教会には「食べ物」のことで相容れない二つのタイプがありました。つまり、「弱い者」と「強い者」です。「弱い者」とは、肉を食べず、酒を飲まず、野菜だけを食べていた者たちです。それは今日の「菜食主義者」とは異なります。当時のローマの都市では偶像の宮にささげた肉を商人たちに払い下げ、商人たちがこれに他の肉を混ぜて、市場で売る風習がありました。ですから、肉を食べることは偶像にささげた肉を食べる恐れがあったために、初めからその「肉」を食べない者たちがいたのです。反対に「強い者」とは、たとえ偶像にささげられた肉であったとしても、そもそも偶像の神などいないのであるから、食べても平気という人のことです。信仰とは無関係だと考え、平気で肉を食べる人たちでした。ここで問題なのは、「強い人」が「弱い人」を見下げてさばいていたことです。逆に「弱い人」も「強い人」をさばいていたのです。

●これは「食べ物」の話ですが、「日」を守ることに言えることでした。「ある日」を他の日に比べて大事だと考える人もいれば、どの日もみな同じく大事だと考える人がいたようです。そうした違いに対して、パウロは互いにさばき合うことなく、「それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい」(ローマ14:5)と勧めています。肝心なことは、「だれのために食べ」、「だれのために日を守っているのか」ということであり、それぞれが「主のために食べ、あるいは守っている」のだとすれば、なにゆえにさばき合うのかと叱責しています。むしろ、「私たちはみな、神のさばきの座に立つようになる」(同、14:10)と結んでいます。つまり、「私たちは、おのれの自分のことを神の御前に申し開きすることになる」という恐れを持つべきだとしています。容易にさばき合うことから教会を守るためには、神の最終的なさばきがあるという観点を見逃してはなりません。それを恐れるべきです。

●さらに、「食べ物」や「日」について、兄弟が心を痛めているのなら、つまずきとなるものを置かないように決心すべきことをも勧めています。本質的な問題ではないことによって兄弟を滅ぼすことがないように、むしろお互いの霊的成長に役立つことを追い求めるべきだとパウロは述べています。こうした視点は、イエシュアが天の御国の視点からすべてのことを教え、行ったことと相似しています。これを難しい

言い方をするなら、**終末論的視点によるパラダイム(物事の考え方、理解の仕方)**ということになります。

●この視点からの教えは、当然、人の教えとは異なります。「終わりに起こること」を知って教えているのは、御父から遣わされた御子イエシュアだけです。たとえ神を敬っているように見えても、人の教えを神の教えとして教えている者たちに対して、イエシュアはこう言っています。「わたしの天の父がお植えにならなかった木は、みな根こそぎにされます。彼らのことは放っておきなさい。彼らは盲人を手引きする盲人です。もし、盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むのです。」(マタイ 15:13~14)と。

## 2. 「さばいてはならない」という理由

### (1) さばかれないため

●ここでイエシュアは「さばいてはならない」のは「さばかれないため」だとしています。「自分がさばかれないために、人をさばかない」というのはこの世の処世術です。「人のことをとやかく言わないのは、自分も人からとやかく言われぬため」です。しかし、イエシュアがここで教えようとしていることは、単なるこの世の処世術のことではありません。イエシュアが語ったことをよく聞いてください。「人をさばいてはなりません」とは言っていません。「さばいてはならない」(**Judged not/Don't judged**)と言っているのです。あなたが「さばいてはならない」のは、「あなたがたが**神によって**さばかれないため」なのです。つまり、自分の善悪の基準によってさばくことを問題にしているのです。なぜなら、自分の善悪の基準によって考え、判断することは、エデンの園にあった「善悪の知識の木から取って食べた」罪の結果の現われなのです。確かに、このさばきの対象が人であることも含んでいます。ここではむしろ、神の基準によってではなく、自分の善悪の基準によってすべてを判断し決定づけること(=さばく)を意味しています。

●「終わりの日」には、罪に対する神の最終的、かつ決定的なさばきがあります。救いか滅びか、いのちか死か、それを決定づけるさばきです。しかし恐れることはありません。「**御子を信じる者は、さばかれない。**」(ヨハネ 3:18 前半)とあるからです。しかし反対に、「信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている」(同節後半)とあります。「信じなかった」というのは、御子を信じるチャンスがいつもあったのに、ついに「信じようとしなかった」ことを意味しています。「信じなかった」は完了形です。その結果「すでにさばかれている」(現在形)状態にあるのです。信じないで終わってしまったがゆえに、神のさばきを免れることができない状態にあるということです。

●ヨハネはそのさばきの理由について次のように述べています。「そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。」(同 3:19)と。聖書が意味している「光」とは神がなさろうとしている事柄、神のご計画とみこころのことです。しかし多くの人々はそのことを聞かされても無関心であるばかりか、むしろそれをますます拒絶しようとしたのです。無関心と拒絶、やみを愛する

(=慕う)行いがやがて「終わりの日」に神によってさばかれるのですが、イエシュアが語られる教えに耳を貸さず、信じなかったことによって、さばきはすでに決定しているのです。

## (2) あなたがさばく厳しい基準でさばかれるため

●マタイの7章2節に「あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです」とあります。それはどういう意味でしょうか。人が人をさばくとき、とても厳しい基準をもってさばくのが常です。自分のことを棚に上げて、正論でさばきます。それと同様に、神も厳しい基準でさばかれるということの意味しています。

●ダビデ王は、自分の家来ウリヤの妻(=バテ・シェバ)を自分のものとするために、夫であるウリヤを戦場において殺しました。そのあとでダビデのおかかえ預言者であったナタンがダビデ王のところに来て、こんな話をしました。

ある一人の富んでいる人が自分の客をもてなすのに、自分の家畜を殺すのが惜しくて、隣に住む貧しい人が持っていたたった一匹の小さな雌の子羊を取ってきてお客にご馳走したという話です。ダビデはその話を聞くや否や、大変に怒って、そういうことをする人間は殺してしまわなければならない。子羊も四倍にして返すべきだと言いました。すると、ナタンはダビデに向かって、それをしたのは実にあなただと指摘したのです。ダビデは王です。この世の王であれば、自分が欲しいと思えば簡単に手に入れることができます。しかしダビデはイスラエルの王であり、神の代理者としての王です。神の基準によって国を治めなければなりません。不正や不義をゆるすわけにはいきません。それで、彼は大変に怒って、殺してしまわなければならないと言ったのです。ダビデは自分がさばいたその基準で神からさばかれたのでした。尤も、ダビデ自身が死ななければなりませんでしたが、ウリヤの妻との間に生まれた子どもがさばきのために死んだのでした。

●私たちは自分を棚に上げて、人を正論で厳しくさばきます。しかも、軽々しくさばきます。その要因は、主に対する恐れが欠如にあります。自分を裁判官の席において、正論を振りかざしてさばくことに対して、主は「さばいてはいけません。さばかれないためです。」と警告しています。私たちは自分に対して甘く、人には厳しいのが常ではないでしょうか。

## (3) さばく資格がないゆえに

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書7章3～5節

- 3 また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。
- 4 兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください』などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。
- 5 偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。

●ここには「ちり」と「梁」ということばが対比して使われています。「ちり」と訳された「カルフォス」(κάρφος)は小さな「木の屑(くず)」のことです。「梁」とは家を支えている横柱のことです。いかにもイエシュアが大工であったことをほめかすたとえです。「さばき」とは自分の目の中にある「梁」に気づくことなく、人の目にある小さな「ちり」を取り除こうとする、まことに滑稽な姿です。しかし、これが当時のパリサイ人、律法学者がしていた偽善でした。しかもそのようにして人々を監視し、違反するものにペナルティーを課して、支配していました。そうした彼らの偽善をイエシュアは厳しく追及しています。



●自分の目の中に梁がありながら、人の目の中のちりを取り除く資格はありません。自分の中に大きな罪がありながら、人の小さな罪を指摘することは偽善そのものです。そのことに気づかないことが大きな罪なのです。

### 3. 自分の目から梁を取りのけるためには

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 7章 5節

偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からもちりを取り除くことができます。

●「偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい」とありますが、いったいどのようにして自分の目から梁を取りのけることができるのでしょうか。それは、自分の目を健全にすることです。そもそも、私たちに与えられた目は本来何のためにあるのでしょうか。それは神を見るためではないでしょうか。ところが、私たちの目は本来見るべき神を見るよりも、別のものを見ていることが多いのです。目を意味するヘブル語の「アイン」(אֵין)は、本来、神と神が定められたものを見るという意味です。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 6章 22～23節

22 からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るいが、  
23 もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう。

●ここでの「もしあなたの目が健全なら」の「健全」と訳された言葉は、「単純に、一途に、ひたすら、純真に」を意味するギリシア語の「ハプルース」(ἀπλοῦς)です。つまり、このギリシア語は神のみを見上げることを意味します。そのことによって神の栄光にあずかることができるのです。つまり、神がなさろうとすることを一途に求めることによって、からだ全体が照り輝くのです。黙示録 22章 4節にあるように、私たちの救いの完成(究極)は、顔と顔を合わせるように、「**神の御顔を仰ぎ見る**」ことなのです。

●「先生、〇〇くんがよそ見をしています。」と、よそ見をする者だけが人のよそ見に気づき、まじめに先生の方を見ている子はそのことに気づきません。そのように、自分を棚に上げて人の目の中にある「ちり」を取ろうとする偽善者になるのではなく、「まず自分の目から梁を取りのける」ための秘訣は、自分のうちにある梁を一心に見つけようとするよりも、むしろ、主にある私たちが**神を仰ぎ求めていく一途さ**を身に着けることではないでしょうか。そすることで、自分の目の中にある梁に気づかせられるのではないのでしょうか。ますます**神である御子イエシュアに専心する心の目**を持ちたいと願わされます。それは周囲の者に大きな影響力をもたらすと信じます。

2017.11.19